

# 新中学校用検定済英語教科書における 非英語母語話者の言語と文化

川 又 正 之

## はじめに

日本の中学校においては、2017（平成29）年に学習指導要領の改訂が告示され、2021（令和3）年度から施行されている。中学校外国語科（英語）用文部科学省検定済教科書（以下「検定済英語教科書」と表記）についても、この新しい学習指導要領に基づいて作成された新版が2021（令和3）年4月より使用されるようになった。

本稿では、この新検定済英語教科書6種類<sup>1)</sup>について、設定された登場人物やその登場人物たちが英語を使用する場面を中心に、特に英語の非母語話者の言語と文化がどのように取り扱われているかを、学習指導要領の「教材選定の観点」を踏まえながら分析を行う。

まず、現行学習指導要領およびその解説書において、言語と文化の取り扱いがどのように規定されているのかを概観する。次に、実際に使用されている教科書から具体例を挙げて分析と考察を試みる。

## 1. 学習指導要領における教材選定の観点

現行中学校学習指導要領（2017（平成29）年告示版「外国語」）の「教材選定の観点」について、言語と文化の取り扱いに関連する記述を取り上げる。

### 「(3) 教材選定の観点

(3) 教材については、次の事項に留意するものとする。

イ 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点到配慮すること。」

この記述に関連して、同学習指導要領解説書（『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』 以下、「解説書」と記載）には以下のような説明がある。

「『日常生活、風俗習慣』とは、家庭や学校、社会における日常の生活や風俗習慣などを示している。学年が進むにつれて、これらのことについての人々の考え方などを含めて取り扱うことになる。英語の学習を通して、人々の生活や風俗習慣の相違に一層の関心をもたせ、文化の多様性に着目させることが必要である。

『物語』は、世界各国に様々なものがあるが、選択に当たっては、生徒の発達の段階や興味・関心に応じたもの、様々な考え方などが含まれているものなどを適切に取り上げることが考えられる。

『地理、歴史』については、世界の様々な地域の様子、自然の景観、歴史上の人物や出来事など、生徒の興味・関心に応じて、学習意欲を起こさせるような題材を選択することが大切である。

『伝統文化』とは、昔から伝えられてきた風習・制度・思想・技術・芸術などを示している。国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、外国の伝統文化について知ることは、幅広い国際的な視野を身に付ける観点から大切なことである。また同時に、自国の伝統文化について外国の人々に発信できる素養を培うことも必要であり、そのための適切な題材を選択することが求められる。

『自然科学』については、発明や発見などの科学技術に関すること、あるいは自然現象や生物に関することなど、生徒の興味・関心を喚起するような題材を用意することが大切である。」（pp. 98-99）

「文化の多様性」、「様々な考え方」、「世界の様々な地域の様子…」といった記述から、多様性を尊重しようとする姿勢が感じられる。また、「伝統文化」については、外国の伝統文化について知るだけではなく、日本の伝統文化を発信できるようになることを求めている。

題材の選択に関しては、以下の三つの観点が示されている。

「(ア) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。」

解説書では、以下のように説明されている。

「公正な判断力や豊かな心情を身に付ける上で、様々な人々の考え方に接することのできる適切な題材を選ぶことが必要であることを示したもので

ある。

広く他の国の人々の考え方などを知ることにより、それらに対して寛容になるとともに、公平に正しく判断する力を養うことにもなる。また、様々な人々を理解することを通して豊かな人間性を育てることにもなる。

題材については、英語を使用している人々をはじめ世界の様々な人々の多様な考え方や行動の仕方について知ることができるようなものを選択することが大切になる。」(p. 99)

「様々な人々の考え方に接する…」、「広く他の国の人々の考え方などを知る…」、「様々な人々を理解する…」、といった記述から、やはりここでも多様性を重視する姿勢が感じられる。題材については、「英語を使用している人々をはじめ世界の様々な人々の多様な考え方や行動の仕方」とあり、英語圏以外の人々について取り上げることについても認めていることがわかる。次節で取り上げる各検定済教科書の登場人物についても、これを反映した設定がなされている。

「(イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。」

解説書では、以下のように説明されている。

「英語の学習を通して、我が国の文化と、英語の背景にある文化との共通点や相違点を知ることになるとともに、そうしたことに関心をもち、理解を深めようとする態度を育成することが大切である。複数の文化に触れることが、我が国の伝統文化についての理解を深め、文化の多様性に対してより寛容になることに資するとともに、英語によるコミュニケーションの中で我が国の文化を発信することにもつながっていくことが考えられる。そのような観点から適切な題材を選ぶことが必要であることを示したものである。」(p. 99)

「複数の文化に触れることが、我が国の伝統文化についての理解を深め、文化の多様性に対してより寛容になることに資する」とあり、自文化をよりよく理解するためには、他の文化を知る必要があるという、文化相対主義的な視点が打ち出されている。

「(ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。」

解説書では、以下のように説明されている。

「題材の選択に当たっては、広い視野から国際理解を深め、国際協調の精神を養うのに役立つもので、生徒の興味・関心を引き出し育てることのできるような適切なものを選択するなどして、正しい理解が図れるように配慮することが大切である。その際、文化の多様性や価値の多様性に気付かせ、異文化を受容する態度を育てる。さらに、世界の国々の相互依存関係を正しく認識させるなど、生徒に世界の中の日本人であることの自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うように配慮することが大切である。」(p. 100)

「文化の多様性や価値の多様性に気付かせ、異文化を受容する態度を育てる。」は、学習指導要領において繰り返し強調されている最も基本的な言語文化観である。

これまで見てきた通り、学習指導要領および同解説書においては、英語のみならず、世界の様々な言語や文化を題材として取り上げることが認められている。さらに、その学習を通して多様な価値観を受容し、人間として成長していくことが期待され、また、求められていると考えられる。

次節では、実際の検定済教科書の分析を行う。

## 2. 新中学校検定済英語教科書の分析－非英語母語話者の言語と文化の観点から

新中学校検定済英語教科書について、まず主要登場人物の設定とその出身地域を概観する。そのあと、設定された英語の非母語話者の登場人物の言語と文化が、どのような形で取り扱われているかを検討することにする。

### ① 主要登場人物の設定とその出身地域

教科書本文の中でどのような登場人物が設定されているか、またその登

場人物の出身地域はどこかを教科書ごとにまとめることにする。なお、本稿では個々の教科書の優劣を比較、判定することを目的としていないため、教科書名は明示しないことにする。

(1) 教科書A

中学生：加藤陸（日本）、田中花（日本）、Dinish Sharma（通称Dinu）（インド）、Katherine Jones（通称 Kate）（オーストラリア）、李静（通称 Jing）（中国）、Mark Davis（通称 Mark）（アメリカ）

中学生以外：丘大輔（日本）わかば中学校の英語教師、Lucy Brown（イギリス）わかば中学校のALT (Assistant Language Teacher)

上記以外に、“Take Action! Listen”の箇所、以下の登場人物が設定されている。

加藤夏海（加藤陸の姉）：カナダのバンクーバーに高校1年生の時に留学し、現地の高校に通っている。

グリーン家：夏海のホームステイ先。

ジョン（父）、モリー（母）、マット（13歳の息子）、マリア（10歳の娘）、オリビア（近所に住む祖母）※グリーン家の人々はバンクーバー在住で英語を使用しているという設定であるが、それぞれの言語的・文化的背景については特に記載がない。

(2) 教科書B

中学生：斉藤朝美（日本）、本田海斗（日本）、Joshua Santos（フィリピン）、Margaret Brown（オーストラリア）

中学生以外：斉藤卓也（日本）朝美の兄でフィリピンに留学中、戸田幸一（日本）緑中学校の英語教師、Amy Cook（アメリカ）緑中学校のALT、Mr. and Mrs. Wilson（アメリカ）海斗のホームステイ先の老夫婦、Mr. Baker（出身地記載なし）緑中学校の新しいALT

(3) 教科書C

中学生：古瀬真央（日本）、和田健（日本）、小野美希（日本）、Daniel Smith（アメリカ）、Emily Jones（オーストラリア）

中学生以外：Ms. Miller（アメリカ）みらい中学校 ALT

この教科書では、日本語母語話者を除く非英語母語話者が主要登場人物として設定されていない。上記以外には、“Scenes”の箇所、以下の登場人物が設定されている。

亜美（日本）、ベン（ニュージーランド）、将（日本）、スー、ジョー

※ベンは会話の中で自身がニュージーランド出身であることを述べている。スー、ジョーについては、特に記載がない。

#### (4) 教科書D

中学生：小野あやか（日本）、谷健太郎（日本）、Mei Lee（シンガポール）、Bob West（アメリカ）

中学生以外：加藤先生（日本）英語教師、Ms. King（オーストラリア）ALT

#### (5) 教科書E

中学生：井村光太郎（日本）、後藤絵里（日本）、Christina Rios（アメリカ）、Kim Hajin（韓国）

中学生以外：Ms. Brown（オーストラリア）本町中学校の英語教師、Nicholas Rios（アメリカ）Christina の弟で小学生。

#### (6) 教科書F

中学生：佐藤あおい（日本）、中田空（日本）、Emily Hill（アメリカ）、Chen Lee（シンガポール）

中学生以外：Moana Bell（ニュージーランド）中学校の英語教師。

※上記以外に、“Practice”の箇所、以下の登場人物が設定されている。説明はないが、名前から判断する限り、全員、日本語母語話者であると考えられる。

Ken, Saki, Yuta, Hana, Mayu, Ms. Oka, Mr. Yamada

各教科書の登場人物の出身地域をまとめると、以下の「表1」のようになる。◎は中学生の主要登場人物、○は中学生以外の主な登場人物を示している。（教科書の本文以外の登場人物については、分析の対象から除外してある。）

表1：登場人物の出身地域（2021（令和3）年度版）

	教科書A	教科書B	教科書C	教科書D	教科書E	教科書F
日本	◎◎	◎◎	◎	◎◎	◎	◎
インド	◎					
韓国					◎	
中国	◎					
シンガポール				◎		◎
アメリカ	◎	○	◎◎	◎	◎◎	◎
ニュージーランド						○
オーストラリア	◎	◎	◎	○	○	
イギリス	○					
フィリピン		◎				

登場人物の設定がもっとも多いのが教科書Aで6か国、教科書B、D、E、Fが4か国で教科書Cが3か国となる。日本、英語を母語とする地域、英語を第二言語とする地域、英語を異言語（外国語）とする地域、という四つの観点から設定が行われているが、教科書Cは、日本と英語母語圏出身者のみの設定となっている。

出身地域では、日本を除くアジア地域ではシンガポール（2）（以下、カッコ内は教科書数）、インド（1）、韓国（1）、中国（1）、フィリピン（1）となっている。英語を母語とする地域では、全教科書（6）がアメリカ合衆国を取り上げており、他はオーストラリア（5）、ニュージーランド（1）、イギリス（1）となっている。

川又（2017）では、2016（平成28）年度版検定済英語教科書<sup>2)</sup>について同様の分析を行っているので、その結果も「表2」に示す。なお、その後、発行を取りやめたり新たに加わったりした出版社があるため、「教科書A」等の名称（仮称）については、「表1」とは必ずしも一致しない部分があることをあらかじめお断りしておく。

表2：登場人物の出身地域（2016（平成28）年度版）

	教科書A	教科書B	教科書C	教科書D	教科書E	教科書F
日 本	◎◎	◎	◎	◎◎	◎	◎
イ ン ド	◎	◎◎	◎	◎		
韓 国						◎
中 国	◎					
シンガポール					◎	
ア メ リ カ	◎	◎◎	◎◎	○	◎	◎
カ ナ ダ	◎	◎	○	◎		
オーストラリア	◎		◎	◎	○	○
イギリス	○	○	◎			
ブラジル				◎◎		
ド イ ツ		◎				
フランス	○					

登場人物の設定がもっとも多いのが教科書Aで8か国、教科書B、C、Dがそれぞれ6か国、教科書E、Fが4か国となる。

2016（平成28）年度版（以下、「旧版」と表記）も、2021（令和3）年度版（以下、「新版」と表記）と同じく、日本、英語を母語とする地域、英語を第二言語とする地域、英語を異言語（外国語）とする地域、という四つの観点から設定が行われている。

出身地域では、日本を除くアジア地域で設定が多いのがインド（4）（以下、カッコ内は教科書数）で、他は韓国（1）、中国（1）、シンガポール（1）となっている。英語を母語とする地域では、全教科書（6）がアメリカ合衆国を取り上げており、他はオーストラリア（5）、カナダ（4）、イギリス（3）となっている。非英語使用地域としてはブラジル（1）、ドイツ（1）、フランス（1）が登場している。

日本を除く3つの観点からの出身地域をそれぞれの年度版教科書ごとにまとめると、以下のようになる。



表3：年度版教科書の比較（カッコ内は教科書数）

	2021（令和3）年度版	2016（平成28）年度版
英語を母語とする地域	アメリカ合衆国(6) オーストラリア(5) ニュージーランド(1) イギリス(1)	アメリカ合衆国(6) オーストラリア(5) カナダ(4) イギリス(3)
英語を第二言語とする地域	インド(1) シンガポール(2) フィリピン(1)	インド(4) シンガポール(1)
英語を異言語（外国語）とする地域	韓国(1)、中国(1)	韓国(1)、中国(1)、 ブラジル(1)、ドイツ(1)、 フランス(1)

「英語を母語とする地域」では、旧版では4種類あったカナダが、新版では0となり、かなり大きな変化となっている。イギリスも、旧版では3種類の教科書で取り上げられていたのが、新版では1種類と少なくなっている。その他、新版では、ニュージーランドが新たに加わっている。アメリカ合衆国とオーストラリアは、新旧両版で変わることなく、前者が6種類（全教科書）、後者が5種類となっている。

「英語を第二言語とする地域」では、旧版ではインド、シンガポールであったのが、新版では、この二か国に加えて、フィリピンが新たに登場している。ただ、インドは旧版では4種類の教科書で取り上げられていたのが、1種類とかなり減少している。

「英語を異言語（外国語）とする地域」では、旧版にはあったブラジル、ドイツ、フランスがなくなり、新版では韓国と中国のみとなった。

旧版と比較すると、非母語話者の設定については、「多様性」は確保されているものの、新版はやや縮小傾向にある、と指摘できるかもしれない。一方、英語を母語とする地域、特にアメリカ合衆国とオーストラリアを重視する傾向は、新旧両版に共通して見られる特徴である。

## ② 非母語話者の登場人物の言語と文化

それでは、英語の非母語話者の登場人物の言語や文化は、実際にどのような形で教科書に取り上げられているのであろうか。以下、教科書ごとに具体例を示す。

### (1) 教科書A

3年生用教科書では、“Lesson 2: Languages in India”で、インドで使

用されているさまざまな言語が取り上げられている。

最初のパートでは、インド出身で日本の中学校に在籍しているディヌーが、インドで使用されている紙幣（10ルピー）をもとに次のような説明を行っている。

Rupee notes are used in India. This is a ten rupee note. Many languages are printed on it.

I speak Marathi with my family at home. I use Hindi with my friends and English at school. My use of these languages depends on the person and situation. (p. 20)

多言語国家インドについて紙幣をもとに説明し、ディヌー自身がマラーティー語、ヒンディー語、英語の三つの言語を使用する「複言語話者」<sup>3)</sup>でもあり、状況に応じてそれらを使い分けていることも述べられている。登場人物自らが、自身の使用する母語を含む複数の言語について触れている教材は、今回調査した全6種類の教科書中、この一例しかない。

次のパートでは、ディヌーと花（日本人の女子中学生）がインド映画について話をしている。

Hana: I'm looking forward to watching this. I've never seen an Indian movie.

Dinu: I'm sure you'll enjoy it. The film was directed by a famous Indian actor.

Hana: I see. Is the movie in Marathi, Hindi, or English?

Dinu: Hindi. With subtitles in English. Indian films are released in several languages. (p. 22)

「紙幣」に次いで、インド映画の「多言語性」について述べられている。

三番目のパートでは、「インドのガイドブックに、インドで使われている言語について書かれたコラムが掲載されています。」との説明があり、以下の英文が掲載されている。

- ① India is located in South Asia. More than one billion people live in India. They speak many languages. In India, there is a saying, “Every four miles the speech changes.” There are 22 official languages, and more than 250 other languages are spoken in India.
  - ② One of the major official languages of India is Hindi. More than 500 million people can speak it, and you know a few words, too. For example, ‘pajamas’ and ‘shampoo’ come from Hindi. The Japanese word *daruma* comes from Hindi, too.
  - ③ Urdu is another official language. It is mostly spoken in Northern India. Its writing system comes from Arabic, so it goes from right to left. The language is known for its beauty and grace. A lot of great literature and poetry are written in Urdu.
  - ④ English is also commonly used. English was not spoken in India until the British came. India was ruled by them from the 1600s to the mid-1900s. Many people needed to learn English. Later the British left, but their language remained. Now English is used across the country in schools and businesses. Some people use it to talk with friends from other places.
  - ⑤ These are only three of the languages of India. You will come across many others. Enjoy their diversity and beauty when you visit.
- (pp. 24-25)

インドの多言語性について、ヒンディー語、ウルドゥー語、英語の三つの言語を取り上げて説明している。

ヒンディー語は、5億人の話者を持つ主要な公用語のひとつであり、「シャンプー」のような日本語にも取り入れられた単語があることが紹介されている。

ウルドゥー語は、書字法がアラビア語から来ていること、たくさんのすぐれた文学作品があることが説明されている。

英語については、もともとはインドの言語ではなく、イギリスの植民地支配により使われるようになったこと、またそのイギリスが去った後も、英語そのものは残って国内の共通語としての役割を果たすようになっていることが述べられている。

全体的に多言語・多文化・多民族国家インドの現在の状況とその歴史について、簡潔かつ的確にまとめられた内容となっている。

## (2) 教科書B

世界の言語と文化について、3年生用の教科書の“Unit 0: Three Interesting Facts about Languages”で、以下のような内容の英文が掲載されている。翻訳家になりたい朝美（日本人女子中学生）が、世界の言語についてレポートを書いている、という設定である。

## Three Interesting Facts about Languages

## 1. How many languages are there?

- It is said that about 7,000 different languages are spoken in the world.
- About 80 percent of them are used by fewer than 100,000 people.

## 2. What is the most common first language?

- Chinese is used as a first language by the greatest number of people.
- English is used by the third greatest number.

## 3. Should we learn another language?

- Many researchers believe that knowledge of another language can increase our brain power.
- If we use more than one language, we can choose from a wider variety of jobs. (p. 4)

世界の8割の言語の話者数が10万人以下、という事実を提示しているのはよいが、あとは中国語と英語という「大言語」の記述にとどまり、母語以外の言語を学ぶ意味についても、脳の活性化と就職に有利、という実利的な理由づけにとどまってしまっている。

また、上記の英文に加えて、世界地図に、中国語、英語、スペイン語を公用語とする地域が色分けされて示されている。地図の下“Tool Box”というコラムでは、「国と公用語（主な使用言語）」として、以下のよう

1. Brazil ブラジル — Portuguese ポルトガル語
2. Canada カナダ — English, French フランス語
3. China 中国 — Chinese
4. Egypt エジプト — Arabic アラビア語

5. India インド — Hindi ヒンディー語, English

6. Peru — Spanish スペイン語

上記の各国と各言語の関係は、どこの国に行きたいか、そこでは何語が話されているか、という会話練習の材料として提示されている。世界のさまざまな言語に目を向けさせよう、という趣旨であると考えられるが、カナダやインドについては、それぞれに複雑な言語事情があり、中国語も一様ではない。生徒たちに単純化して受け止められないようにする指導および配慮が必要であろう。

1年生用教科書の“Unit 6: A Speech about My Brother”では、先ほどの朝美が、兄の卓也についてスピーチをしている。卓也は、英語の勉強のためにフィリピンに留学中、という設定である。

Hello, everyone. Look at this picture. This is Takuya, my brother. He's twenty years old. He lives in Cebu, the Philippines. He studies English at a language school there. He meets many Asian students at school.

Takuya goes to school on weekdays, and sometimes enjoys scuba diving on weekends. Cebu has many beautiful beaches. He and his friends go diving together. He really likes Cebu.

Takuya writes a blog about school life, local food, nature, and nice spots for diving in Cebu. He doesn't write very often, but he gets a lot of nice comments. I enjoy his blog very much.

Takuya usually posts pictures on his blog, but he can't take pictures in the sea. He doesn't have a waterproof camera. So he wants one. He really loves the beautiful sea life. Thank you. (pp. 59-60)

英語の勉強とスキューバダイビングのための留学、ということであれば、必ずしもフィリピンである必要はなく、やや皮相的な印象を受ける。英語を学ぶのになぜフィリピンなのか、という問いかけが、朝美のスピーチには必須であろう。

フィリピンを取り上げるのであれば、現在の公用語の一つとしてなぜ英語が使われるようになったのか、地方語と英語の関係はどのようなになっているのか、英語ができないことがどのような社会的不利益を生み出しているのか、等について、日本人の生徒たちにも考えさせていくことが求めら

れよう。フィリピンにはなぜ多くの英語学校があるのか、その社会的、歴史的、政治的な背景を知るとは、美しい自然とスキューバダイビングという観光案内的な紹介よりも、極めて重要な「学習」であると考え。実はこの教科書の主要登場人物の一人として、Josh（ジョッシュ）という小学校の時から日本で暮らしているというフィリピン出身の男子中学生が設定されている。しかし彼はこの課には全く登場しない。いったい何のために登場人物として設定されたのか、疑問に感じる場所である。

### (3) 教科書 C

この教科書には、日本語母語話者以外の英語の非母語話者の主要登場人物が設定されていない。1年生用の“Program 9: A Trip to Finland”は、美希（日本人の女子中学生）の家で、ダニエル（ニューヨーク出身の男子中学生で現在日本の中学校に在籍）と健（日本人の男子中学生）が美希のフィンランド旅行の話を書く、という内容となっている。

以下、本文を示す。

Miki: Take a look at these pictures. I visited Finland last week.

Daniel: Wow! They are very beautiful.

Miki: Yes. It's a country of forests and lakes.

Daniel: I see.

Miki: I saw the aurora and relaxed in a sauna.

Daniel: Finnish people invented saunas, you know.

Miki: Right. They have saunas in their homes!

Daniel: How nice!

Miki: Some people take a sauna and then jump into a lake.

Daniel: Sounds fun.

Miki: Finland is famous for Moomin and Santa Clause too.

Daniel: What food is famous?

Miki: Well, do you know *salmiakki*?

Daniel: No, I don't. What's that?

Miki: It's a bitter and salty candy. Many Finnish people like it. I ate it only once during the trip.

Ken: Is it tasty?

Miki: It's a secret. I bought one for you.

Ken: Thanks.

Miki: This is *salmiakki*. I found it at a supermarket.

Daniel: Did you have any other experiences?

Miki: Yes. I saw a reindeer on the road.

Daniel: On the road? Amazing!

Miki: And I enjoyed the long nights.

Daniel: What do you mean?

Miki: The sun didn't rise until 11 a.m.

Daniel: What time did the sun set then?

Miki: About 2 p.m.

Daniel: I didn't know that.

Miki: In June, the sun doesn't go down.

Daniel: Great ! I can play outside all day.

(pp. 106-108)

フィンランドについて、オーロラ、サウナ、ムーミン、サンタクロース、サルミアッキ（菓子）、トナカイ、白夜に極夜と、実に多くのものが紹介されているが、単なる事象の羅列に終わってしまっているようにも感じられる。例えば、サウナであれば、それがなぜフィンランドから生まれたのか、という気候的な背景の記述が必要であろうし、白夜や極夜であれば、（その時期に）フィンランドの人々がどのような生活を過ごしているのか、日本とはどのような生活様式の違いがあるのか、という掘り下げも必要であろう。

実はこの教科書の旧版でも同様な内容の課があった。そこでは、主要登場人物の一人である日本人女子中学生（この版では「由紀」という名前）が、“They speak three languages, Finnish, Swedish, and English.”と述べており、フィンランドの言語状況についても触れていた<sup>4)</sup>。新版で言語についての記述が完全に削除されてしまったのはどうしてなのであろうか。

さらに、上記の場面設定自体にも問題があると指摘できる。美希の家で話を聞く、ということであれば、英語ではなく日本語が使用されるのが自然であろう。健が同席しているということであれば、なおさらである。日本に滞在しているダニエルが、日本語を使用せずあくまで自身の母語である英語に固執するのであれば、それこそ自言語・自文化中心的な考え方

あり、学習指導要領の教材選定の観点とは相容れないものではないか。

#### (4) 教科書 D

1年生用の教科書の“Lesson 9: Helping the Planet”で、メイ（シンガポール出身の女子中学生で日本の中学校に在籍）がゴミ処理の問題について発表している。メイの発表の後、健太（日本人男子中学生）、あやか（日本人女子中学生）、ボブ（アメリカ出身の男子中学生で日本の中学校に在籍）の3人がメイに質問をしている。

Look at this table. It shows the amounts of trash in Singapore, Japan, and the U.S. Now, look at these graphs. Japan burns 80 percent of its trash and recycles 20 percent. On the other hand, Singapore burns 38 percent of its trash and recycles 60 percent. Singapore is a small country, and there isn't much room for landfills, just like Japan. Recycling is very important. (表やグラフについては省略)

Kenta: You recycle a lot in Singapore!

Aya: Singapore doesn't produce so much trash. Japan produces a lot of trash.

Bob: Are there many trash cans on the street in Singapore?

Mei: Yes, there are.

Bob: There aren't many on the street in Japan, but the streets look clean.

Mei: I agree. How about our school? How many trash cans are there in our school?

Kenta: One in every classroom.

Aya: We should reduce the amount of our trash, too.

(pp. 116-117)

メイが自国のことについて話しているのは、この部分のみである。ゴミ処理に対して意識の高いシンガポールの取り組みを紹介し、地球環境の保全を考えさせるのはよいと思われるが、言語状況についての言及が、この教科書の3年間を通して全くないのは問題であろう。シンガポールには中華系、マレー系、インド系、その他の人々が共存しており、それぞれ中国語（北京語）、マレー語、タミル語およびその他の地域言語を母語として



いる。英語を母語としている人は極めて少数ではあるが、逆に少数であるがゆえに中立的な言語と考えられ、政治、経済、教育の中心言語としての地位が与えられている。言語政策的には英語と各民族の母語の二言語政策が取られたが、実際には英語にかなり重点を置いた教育が行われてきた。シンガポールについて取り上げるのであれば、このような英語をめぐる歴史的、政治的な背景について学ばせることは必須であろう。メイを主要登場人物の一人として設定したのであれば、“Singlish”（シンガポール独自の英語）も含めて、自身の言語使用状況について話させる、といった内容を盛り込んでもよかったのではないだろうか。

#### (5) 教科書 E

この教科書では、韓国出身のKim Hajin（日本の中学校に在籍）が主要登場人物の一人として設定されているが、朝鮮語や韓国の文化について話している場面がない。そこで、ここでは、1年生用教科書の“Let’s Read More”（巻末の読み物教材）のティナ（ニューヨーク出身の女子中学生で日本の中学校に在籍）が書いた「日本語」（非英語母語話者の言語）についてのレポートを取り上げることにする<sup>5)</sup>。

以下、本文を示す。

#### My Japanese Lessons

I came to Japan last year. I take Japanese lessons on weekends. I study Japanese very hard, but it’s difficult for me.

For example, in Japanese, they count pencils this way — *ippon, nihon, sambon*.... But they count minutes this way — *ippun, nifun, sampun*.... *Pon-hon-bon* and *pun-fun-pun*. That’s confusing.

And this is another example. I learned the Japanese phrase “*kekodesu*.” It has different meanings — “That’s wonderful,” “That’s all right,” or “No, thank you.” That’s very strange. How can I use it?

And this is also an example. They use many different words about clothes — *kiteiru, haiteiru, kabutteiru, tsuketeiru*.... In English, we use “wear” for all our clothes — wear a shirt, a skirt, a cap, a scarf, gloves, and so on. That’s very easy, isn’t it?

Japanese is very different from English. It’s very difficult for me, but it’s also interesting. So I enjoy my Japanese lessons. I want to learn

1,000 *kanji* next year.

(pp. 151-152)

このティナの言語観には、極めて深刻な問題点が隠されていると指摘できる。ティナは日本語における物の数え方の違いを指摘し、“That’s confusing.”と述べているが、英語には、発音とつづり字の関係の不規則性が厳然として存在している。また、可算名詞と不可算名詞、単数と複数など、日本語にはない区別もしなければならない。英語を異言語として非母語話者が学ぶ際には、このような困難点があることを全く意識せず、ただ自身のせまい日本語学習の経験のみから、日本語学習の難しさを断定することは、きわめて一方的で言語帝国主義的な態度である。どの言語にも（ティナの言葉を借りれば）“confusing”な面があり、その在り様が言語によって異なっている、ということこそ認識しなければならない言語事実であろう。いや、むしろ、この「違い」こそが、それぞれの言語の「個性」を際立たせ、世界の諸言語の「多様性」を作り出しているとも言える。言語の多様性はそれを否定するのではなく、それを認め合い、尊重し合う意識・態度の育成が必須である。

日本語の「結構です。」についても、その多義性をあげて“That’s very strange.”と述べているが、日本人はこの表現を、場面や状況に応じて適切に使い分けている。この使い分けが（日本語の非母語話者には）むずかしい、ということであれば、“That’s wonderful.”（すばらしいです。）“That’s all right.”（問題ありません。）“No, thank you.”（いいえ、結構です。）と、最後の表現のみに「結構です。」の使用を限定することもできる。このようにすることにより、意味の誤解が生じるのを防ぐとともに、より学びやすい異言語学習の過程を示すことが出来るのである。

ティナはまた別の例として、何かを身に着ける際の動詞として、日本語では「着ている」「はいている」等の異なった表現を用いなければならないのに対し、英語では“wear”一語で済むので“‘That’s very easy, isn’t it?’”と述べているが、これも極めて独善的で危険な断定である。例えば、「焼く」という日本語の動詞に対して、英語では、“bake”（魚・野菜・パン・ケーキの場合）、“roast”（肉）、“broil”（網に載せて直火で）、“barbecue”（材料にたれをつけ、直火で焼きながら食べる場合）、“toast”（スライスしたパンの場合）、“fry”（卵の目玉焼きの場合）があり、何を焼くかにより、どのような動詞を用いるかについて細かな意味区分がなされている。これは、英語圏では肉食が中心、という食習慣の違い

から生じたと考えられるが、このような例は「なく（生き物が発声をする）」—“cry, weep, sob, wail, bark, howl, roar, yap, whine, baa” や「うつ（何かに力強くあてる）」—“beat, strike, hit, knock, slap, drive” 等、枚挙にいとまがない。そもそも、自然言語について、ある部分が学習しやすく（日本語の母音等）、ある部分が学習しにくい（日本語の文字体系等）とは言える場合があるかもしれないが、ある言語がある言語よりも“easy” とか “difficult” とかを判断すること自体が不可能である。

結局、この教材が主張しているのは、英語は日本語より学びやすい言語だからしっかり勉強しましょう、ということなのであろうか。異言語学習により言語の多様性と相対性を学ぶ、といった学習指導要領の言語文化観は全く抜け落ちてしまっていると言わざるを得ない。

#### (6) 教科書 F

1 年生用の教科書の「Unit 3: 海外からの転校生」で、チェン（シンガポール出身の男子中学生で日本の中学校に在籍）が自己紹介をし、空（日本人男子中学生）が質問をしている。

Hello, my name is Chen Lee.  
 Call me Chen.  
 I'm from Singapore. I like badminton.  
 It's a very popular sport in Singapore.  
 I study Japanese after school.

Sora: Do you like Japanese food?

Chen: Yes, I do. I like *ramen*.

Sora: I like it, too. How about *natto*?

Chen: Um.... I don't like *natto*.

Chen: Look at this picture.

This is chicken and rice.

It's a popular food in Singapore.

Sora: Oh, I like chicken very much.

Chen: Let's make it together someday.

Sora: But I'm not good at cooking.

Chen: Don't worry. I'm a good cook.

(pp. 36-40)

「シンガポールチキンライス」については、同課の“Notes”で、「鶏肉のスープで炊いた米に、ゆでた鶏肉や蒸した鶏肉を添えた料理です。シンガポールの定番料理の1つで、屋台でも人気のメニューです。」とある。本文の対話は、1年生用教科書ということはあるにせよ、やはり単なる表面的なやり取りにとどまっているように思われる。「ラーメン」は好きだが、「納豆」はなぜ嫌いなのかをチェンに話させてもよいのではないか。3年生用の教科書の“Unit 1: Food Cultures”では、イスラム教徒の「ハラール・フード」についても取り上げられているだけに、シンガポール料理についても、さらに深く取り上げてよいと思われる。

2年生用の教科書の“Unit 2: Traveling Overseas”は、シンガポール旅行のマナーをチェンが紹介する形を取っている。

When you travel in Singapore, you must follow the local rules. Here are four examples.

1. You must not litter in public places.
2. You must not chew gum.
3. You must not feed pigeons.
4. You must not bring durians into trains or buses.

(p. 24)

内容からすると、紹介するのがチェンである必然性は低いと思われる。観光ガイドブックや看板といった設定の方がより自然であろう。また、この課はそれぞれのパートが独立していて、前後の脈絡がない。本来であれば、どうしてシンガポールの人々が景観保持や環境保全に対して意識が高いのか、についての社会的な背景を知りたいところである。チェンにはそのことに触れてもらい、日本の状況との比較を日本人中学生としてもよいのではないか。

シンガポール出身のチェンが自国のことについて話しているのは、この教科書の3年間で、ここで引用した二か所のみである。教科書Dと同じく、シンガポールの言語状況についての言及は全くない。登場人物の設定の意味が問われるところである。

### 3. まとめ—設定された登場人物とその言語と文化

検定済教科書で設定された英語の非母語者（日本語母語話者を除く）の登場人物と非英語圏の言語と文化が、どのような形で関連づけられている

かをまとめると以下ようになる。

(1) 教科書 A

- ・ Dinish Sharma (通称Dinu) (インド)

3年生用教科書の“Lesson 2: Languages in India”で、インドの文化的、言語的状况について自身の体験や言語使用（マラティー語、ヒンディー語、英語）を踏まえて説明している。（第2節で紹介。）

- ・ 李静 (通称 Jing) (中国)

本人が中国語や中国の文化について説明している場面はない。2年生用教科書の“Lesson 6: Tea from China”で、中国から日本に遊びにやってきたいとこのメイ（北京の喫茶店で働いている）が、「切り抜き絵」と将来の自分の希望（“tea master”になること）については話をしている。また、メイが働いている北京のお店のウェブサイトに掲載されている中国茶の説明（英語）が、本文として引用されている。母親（Li Tao）と兄（Li Ming）が同課の“Listen”の聞き取り問題の中で登場するが、それぞれの自己紹介の中には、中国の言語文化的な情報は全く含まれていない<sup>6)</sup>。

(2) 教科書 B

- ・ Joshua Santos (フィリピン)

本人がフィリピン語やフィリピンの文化について説明している場面はない。フィリピンについて取り上げられている課にも登場していない。

(3) 教科書 C

本教科書では、日本語母語話者を除く非英語母語話者が主要登場人物として設定されていない。

(4) 教科書 D

- ・ Mei Lee (シンガポール)

1年生用の教科書の“Lesson 9: Helping the Planet”で、ゴミ処理の問題について発表している。（第2節で紹介。）本人がシンガポールの言語状況やシンガポールの文化について説明している場面はない。また、教科書でシンガポールの言語文化的な内容を取り上げている課はない。

(5) 教科書 E

- ・ Kim Hajin (韓国)

本人が朝鮮語や韓国の文化について説明している場面はない。また、教科書で韓国の言語文化的な内容を取り上げている課はない。

## (6) 教科書 F

・ Chen Lee

1年生用の教科書の「Unit 3: 海外からの転校生」で自己紹介を行い、「シンガポールチキンライス」にも少しだけ触れている。2年生用の教科書の“Unit 2: Traveling Overseas”では、シンガポール旅行のマナーを簡潔に紹介しているが、本人がシンガポールの言語状況やシンガポールの文化について説明している場面はない。

第2節において教科書の具体的な例を分析したが、設定された非英語母語話者の登場人物が教科書の本文において自身の言語や文化について説明する、といったような場面設定は極めて少ないことがわかった。

登場人物とその母語や母文化の結びつきが実際に教材化されているのは、教科書Aのみである。教科書Bでは、せっかく設定された登場人物が、自身の国に関わる課には全く登場しない。同教科書の教師用指導書には、「フィリピン出身の在留外国人が増加しているという実態を踏まえ、ジョッシュをフィリピン出身のキャラクターという設定にした。」<sup>7)</sup>とあるが、そうであるならば、やはり母国についての題材を含む課には登場させるべきであろう。教科書Eも韓国出身の登場人物が設定されているが、題材として韓国の言語文化的な内容を扱う課はない。教科書D、Fは、登場人物の出身国と題材の内容を関連付けるようにしているが、言語と文化における多様性をより丁寧に取り上げるべきであろう。

## おわりに

本稿では、まず、現行学習指導要領およびその解説書において、言語や文化の取り扱いがどのように規定されているのかを概観した。次に、検定済英語教科書について、設定された非英語母語話者の登場人物と、その登場人物の出身国や地域の言語や文化がどのように取り扱われているか、分析を行った。

結論としては、登場人物として非英語圏の地域出身者が設定されていても、その人物の言語や文化について教材化されている例は、きわめて少ないことがわかった。このような「見せかけの多様化」は、学習指導要領の言語文化観とも相反するものであり、早急な改善が必要であろう。また、

中学生が単身で日本に留学してくるという状況は現実的には考え難く、両親についてもその国籍が異なる、といったケースも想定される。このような社会的現状を踏まえた登場人物や場面の設定が求められるところである。

新学習指導要領および新検定済英語教科書については、「話すこと」が「発表」と「やりとり」の2領域に分けられたこと、語彙が、「受容」語彙と「発信」語彙に分けられ、扱うべき語彙数が大幅に増加したこと、高校で教えられていた文法事項が中学校に下りてきたこと、授業を英語で行うことが基本とされたこと、等が話題を呼んでいるが、扱われている内容（題材）そのものについても、より多くの関心と注意が払われるべきであろう。

なお、本稿では取り上げることはできなかったが、今回、分析対象とした新検定済教科書において、英語の母語話者を含む非日本語母語話者の登場人物が、日本で生活し、日本人の友人を得、日本語を学んでいるにもかかわらず、あらゆる状況で英語を使用する場面設定が多くなされていることがわかった。また、日本語を母語とする日本人中学生や成人の日本人の登場人物も、それに合わせるかのように、本来は日本語を使用すべきところであっても、無意識的かつ無批判に英語を使用していることも明らかになった。これは言語・文化相対主義の観点からも大きな問題をはらんでおり、稿を改めて論じることにする。

## 註

- <sup>1)</sup> 分析の対象とした2021（令和3）年度版中学校外国語科（英語）用文部科学省検定済教科書は、以下の6種類18冊である。順不同。

*New Crown English Series* 1～3 株式会社三省堂  
*New Horizon English Course* 1～3 東京書籍株式会社  
*One World English Course* 1～3 教育出版株式会社  
*Sunshine English Course* 1～3 開隆堂出版株式会社  
*Blue Sky English Course* 1～3 株式会社新興出版社啓林館  
*Here We Go! English Course* 1～3 光村図書出版株式会社

- <sup>2)</sup> 分析の対象とした2016（平成28）年度版中学校外国語科（英語）用文部科学省検定済教科書は以下の6種類18冊である。順不同。

*New Crown English Series* 1～3 株式会社三省堂  
*New Horizon English Course* 1～3 東京書籍株式会社  
*One World English Course* 1～3 教育出版株式会社  
*Sunshine English Course* 1～3 開隆堂出版株式会社  
*Total English* 1～3 学校図書株式会社  
*Columbus 21* 1～3 光村図書出版株式会社



- 3) 山川 (2010) は、「復言語主義」を、「それぞれの言語を、個人の体験や生活の必要に応じて使い分けようとする態度」(p. 54)としている。
- 4) 川又 (2017, pp. 26-27) 参照。
- 5) この題材の内容については、川又 (2017, pp. 30-32) で問題点を指摘したが、今回もほぼ同様の内容のものが再録されていたため、ここで再度取り上げることにした。本文の英文に変更がある箇所は修正を行っているが、それ以外は指摘も含めて基本的にそのままである。
- 6) 教科書本体には英文が記載されていないため、以下の音声スクリプトによった。([『New Crown English Course 1 Teacher's Manual 解説編』三省堂 2021. p. 418])
- 7) [『New Horizon English Course 1 Teacher's Manual 解説編』東京書籍 2021. p. 38より。

## 引用・参考文献

- 川又正之 2008.「日本の英語教育における英語帝国主義のイデオロギー(1) - 『学習指導要領』」『外国語教育論集』第30号, pp. 61-73. 筑波大学外国語センター
- 川又正之 2009.「日本の英語教育における英語帝国主義のイデオロギー(2) - 『国際語としての英語教育』」『外国語教育論集』第31号, pp. 101-112. 筑波大学外国語センター
- 川又正之 2013.「中学校英語教科書の比較と分析 - 『英語帝国主義論』の観点から」『敬和学園大学研究紀要』第22号, pp. 157-172. 敬和学園大学人文学部
- 川又正之 2014.「日本の異言語教育政策を考える(2) - 中等教育における英語以外の異言語教育について」『敬和学園大学研究紀要』第23号, pp. 55-72. 敬和学園大学人文学部
- 川又正之 2015.「音声指導と英語帝国主義のイデオロギー(1)」『敬和学園大学研究紀要』第24号, pp. 73-86. 敬和学園大学人文学部
- 川又正之 2016.「音声指導と英語帝国主義のイデオロギー(2)」『敬和学園大学研究紀要』第25号, pp. 17-31. 敬和学園大学人文学部
- 川又正之 2017.「改訂版中学校検定済教科書における言語の取り扱い—題材論の観点から」『敬和学園大学研究紀要』第26号, pp. 17-36. 敬和学園大学人文学部
- 柴田武(編) 1993.『世界のことば小事典』大修館書店
- 本名信行(編・著) 2002.『【事典】アジアの最新英語事情』大修館書店
- 文部科学省 2008.『中学校学習指導要領(平成20年告示)解説 外国語編』開隆堂出版
- 文部科学省 2018.『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』開隆堂出版
- 文部科学省 2010.『高等学校学習指導要領(平成21年告示)解説 外国語編・英語編』開隆堂出版
- 文部科学省 2019.『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編・英語編』開隆堂出版
- 文部科学省 <[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm)> (2021年11月1日確認)
- 山川智子 2010.「『ヨーロッパ教育』における『復言語主義』および『複文化主義』の役割」細川英雄・西山教行『復言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版 pp. 50-64.